

日	時間	内容	場所
<b>第1日</b> 6月5日(土)	9:30-10:15	開講式	名古屋商工会議所 5階 B・C会議室
	10:15-11:20	連絡、プログラムコーディネーター説明	
	11:20-12:10	Web講義の紹介	
	12:10-13:00	昼食	
	13:00-14:20	基礎講座 愛知の環境	
	14:30-16:30	基礎講座ファシリテーション 相模女子大学 九里 教授	
	16:35-18:30	オリエンテーション、自己紹介、ワールドカフェ	
	19:00-21:00	入塾懇親会	
<b>第2日</b> 6月19日(土)	10:00-12:40	講義Ⅰ コロナ禍の先の再生のためのSDGs 慶応義塾大学 蟹江 教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
	15:30-17:30	基礎講座 エネルギー 名古屋大学 小林 准教授	
	17:40-18:30	チーム分け	
<b>第3日</b> 7月3日(土)	10:00-12:40	講義Ⅱ 日本のエネルギー戦略とカーボンニュートラル 東京工業大学 柏木 特命教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
	15:30-18:30	チームディスカッション	
<b>第4日</b> 7月17日(土)	10:00-12:40	講義Ⅲ 資源循環と社会 東洋大学 後藤 教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
	15:30-18:30	チームディスカッション	
<b>第5日</b> 7月31日(土)	10:00-12:40	講義Ⅳ 環境分野でオープンイノベーションを目指す 神戸大学 尾崎 教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
	15:30-18:30	チームディスカッション	
<b>第6日</b> 8月21日(土)	10:00-12:40	講義Ⅴ 国際的な環境問題にどう対処するか 東京大学 高村 教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
	15:30-18:30	チームディスカッション	

日	時間	内容	場所
<b>第7日</b> 9月4日(土)	10:00-12:40	講義Ⅵ 水と気候変動 東京大学 沖 教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
	15:30-18:00	中間発表会	
	18:30-20:30	意見交換会(懇親会)	
	<b>第8日</b> 9月18日(土)	9:30-11:00	
11:10-12:40		企業講演会 ESG 株式会社 野村資本市場研究所 野村サステナビリティ研究センター 江夏 研究センター長	
12:40-13:30		昼食	
13:30-16:00		卒塾生活動	
16:10-17:10		卒塾生との懇談会	
17:20-18:30		AKJ活動紹介	
<b>第9日</b> 10月2日(土)	10:00-12:40	講義Ⅶ 自然の恵みはタダなのか? 京都大学 栗山 教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
<b>第10日</b> 10月16日(土)	10:00-12:40	講義Ⅷ 人類は生態系サービスに支えられている 東京都市大学 涌井 特別教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
<b>第11日</b> 10月31日(日)	10:00-12:40	講義Ⅸ 環境活動は日本社会に何をもたらしたか 中部大学 武田 特任教授	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
<b>第12日</b> 11月13日(土)	10:00-12:40	講義Ⅹ 環境ってなんだろう?—メディアから 中日新聞社 飯尾 説説委員	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:40-13:40	昼食	
	13:40-15:15	講師との懇談	
<b>第13日</b> 11月27日(土)	9:30-12:00	テーマのまとめ・発表準備・発表練習	名古屋商工会議所 3階 第5会議室
	12:00-13:00	昼食	
	13:00-14:30	テーマのまとめ・発表準備・発表練習	
	14:30-17:00	発表会	
	17:10-17:40	修了式	
	18:00-20:00	交流会	

※日程、時間、会場については、変更する場合がございますので、予めご了承願います。

## コロナ禍の先の再生のためのSDGs



慶應義塾大学  
大学院政策・メディア研究科 教授

### 蟹江 憲史氏

新型コロナウイルスの影響でこれまでの様々な取り組みや仕組みが壊れていきました。人のいのちを脅かすウィルスは憎いものですが、この経験を今後に生かしていくことが、コロナに打ち勝っていくためにも必要です。コロナによって明らかになったのは、これまでの取り組みが持続可能ではないということです。そうだとすれば、これを機に、様々な取り組みを持続可能にすることで、本当の意味でコロナに打ち勝っていけると思います。そのための道しるべとなるのがSDGsです。これまで培ってきた変革のシーズを生かしていくにはどうすればよいのか、解き明かしたいと思います。

## 日本のエネルギー戦略とカーボンニュートラル



東京工業大学 特命教授・名誉教授  
科学技術創成研究院 先進エネルギー ソリューション研究センター長

### 柏木 孝夫氏

パリ協定を受け、我が国や米国の関連政策の最新状況を述べる。加えて、再生可能エネルギーに対する光と影、脱炭素型エネルギーシステムの実現に向けた動き、化石燃料の高度利用に対する最新の政策動向等について解説する。電力・ガス小売りの全面自由化に代表されるようなエネルギーシステム改革は、産業界の競争力強化に繋がるだろう。21世紀の我が国の成長エンジンは、脱炭素エコノミーをいち早く実現することにある。実現方策をともに考えたい。

## 資源循環と社会



東洋大学  
情報連携学部 情報連携学科 教授

### 後藤 尚弘氏

資源循環は大きく変わりつつあります。これまでにはリサイクルを基盤とした「廃棄物処理」の話でしたが、環境省が提唱している地域循環共生圏が示すような「地域づくり」の話になってきました。そこには、ライフサイクル思考による資源管理、様々なステークホルダー間のコミュニケーション、経済問題等の諸問題が含まれます。ICTの導入も進められています。資源循環の最新の話と今後について皆さんと考えたいと思います。

## 環境分野でオープンイノベーションを目指す



神戸大学  
大学院科学技術 イノベーション研究科 教授

### 尾崎 弘之氏

環境省の調査によると、国内環境産業の市場規模は、105.3兆円に上り、278万人もの雇用を生んでいます(いずれも2018年)。2000年以来、年率3.3%のCAGRを維持しており、成熟した日本経済において高成長分野と言えます。グローバル市場においても、環境・エネルギーを中心とした環境ビジネスはITやバイオと並ぶ成長市場と位置づけられています。環境分野に限らず新規事業を作るには、イノベーションの仕組みを知る必要があります。講義において新しいアイデアを事業化するプロセスを学んでください。

## 国際的な環境問題にどう対処するか



東京大学  
未来ビジョン研究センター 教授

### 高村 ゆかり氏

地球温暖化をはじめとする国際的な環境問題の解決を目指して、国際社会は、様々な努力を積み重ねています。国際条約が締結され、国際的な環境問題の解決に協力するための枠組みがつくれ、各国の環境法や環境政策に少なからぬ影響を与えています。国際社会がこうした国際的な環境問題にいかに対処してきたか、どうしたらより効果的に対処できるか、日本の環境法や環境政策にどのような影響を与えているかを皆さんとともに考えます。

## 水と気候変動



東京大学  
大学院工学系研究科 教授

### 沖 大幹氏

なぜ水資源は不足するのか、仮想水貿易とは、水へのアクセスに関する国際合意はなぜ達成されたのか、気候変動で水需給や水災害はどのように変化しどのように対応すればよいのか、持続可能な開発に関する2030アジェンダに掲げられた持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けてなぜどのように取り組めばよいのか、などに関し、基礎から先端的な研究成果までを紹介する。

## 自然の恵みはタダなのか?



京都大学  
大学院農学研究科 教授

### 栗山 浩一氏

きれいな空気、水、美しい景観など、私たちは自然から様々な利益を得ています。しかし、自然の恵みの大半は価格が存在しないため、守っても利益が得られません。自然を守るには、自然の恵みがタダではないことを示すことが重要です。そこで、自然の恵みの価値を金銭単位で評価する手法として仮想評価法(CVM)が注目されています。自然の価値を評価する方法を紹介するとともに、自然の価値と保全のあり方について考えます。

## 人類は生態系サービスに支えられている



東京都市大学  
特別教授

### 涌井 史郎(雅之)氏

COP6で目標された「2010年目標」が、その後の地球規模での調査「生態系ミレニウム評価」では「生物多様性は引き続き減少している」という結果となった。そうした背景の中で2010年10月に愛知・名古屋でCOP10が開催された。数多い開催成果の中でも、2050年までの長期目標「自然と共生する世界」の共有とその実現を期すため、第65回国連総会の議決を経た2020年までの短期目標「国連生物多様性の10年」が肝となる。その目標達成の為、国内のあらゆるセクターの参画と連携によって「日本委員会(UNDB-J)」が設立された。10年の長きに亘りUNDB-J委員長代理を務めた立場から、その経過と成果、残された将来課題等について話題を提供する。

## 環境活動は日本社会に何をもたらしたか



中部大学  
総合工学研究所 特任教授

### 武田 邦彦氏

1990年のバブルの崩壊とともに日本社会は大量生産から環境重視へと向かった。それから30年。環境活動は日本社会に何をもたらしたのだろうか? そのプラス面、マイナス面を整理するとともに、「議論をしない日本社会」が何をもたらすのか、子孫にどのような影響を与えるのかについてのまとめを行った。

## 環境ってなんだろう? —メディアから



中日新聞社  
論説委員

### 飯尾 歩氏

生物多様性条約第十回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されてから、今年で10年。最大の成果と言われた名古屋議定書は、単なる自然保護ではなく、遺伝資源、すなわち、生き物の命の恵みを、私たち人間が、公平に、末永く享受するためのルールです。人間の持続可能性を保つ知恵。そこには、日常の暮らしの知恵も含まれます。今、SDGsがブームです。先日、食品の量り売りを奨励する地方のスーパーを取材して感じたことですが、国連が言うからやるのではなく、豊かな暮らしを後世に伝えるためのささやかな暮らしの知恵も、SDGsに在るのだと。考えてみませんか。持続可能性って何だろう?